

飼料原料の動向と 今後の見通しについて

飼料単味課 氏家 太

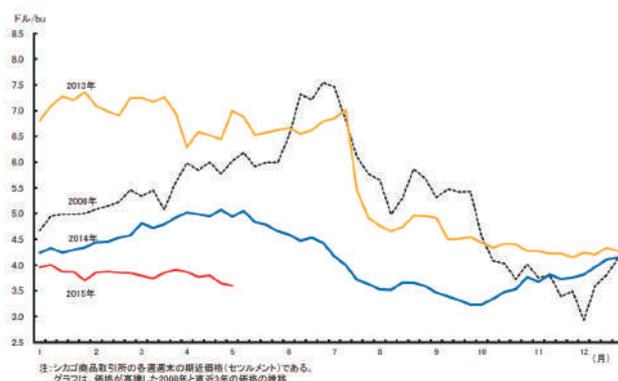
今年も「天候相場」が始まった。5月24日週の米国産地における作付けは、とうもろこし92%、大豆61%が完了している。過去5年平均がとうもろこし88%、大豆55%であるから、今のところ順調に推移していると言ってよい。

この状況が続くとするならば、米国産穀物の需給は一段と緩和するだろう。しかしながら2012年を思い起こすと一抹の不安も覚える。当時、それまで順調だった米国産地の天候が一転、6月中旬以降記録的な急激な干ばつに見舞われ大減産となった。とうもろこしのシカゴ定期も急上昇、8月には史上最高値の8.3ドル／ブッシェルを超える水準に至った。

天候相場を占ううえでは、とうもろこしの受粉期である7月の天候が重要で、今後何が起こるか分からない中で飼料原料の動向を予想することは非常に難しいところであるが、この先、天候には大きな変動がないことを前提に話を進めていきたい。

15ドル／ブッシェル台まで上昇したが、その後の天候が順調に推移し、豊作期待から9月には9ドル／ブッシェル台まで急落。その後大豆粕の上昇につられ年末には10ドル／ブッシェル台まで上昇した。

2015年に入り、南米の豊作期待などからやや値を下げ、現在9ドル／ブッシェル台前半で推移している。

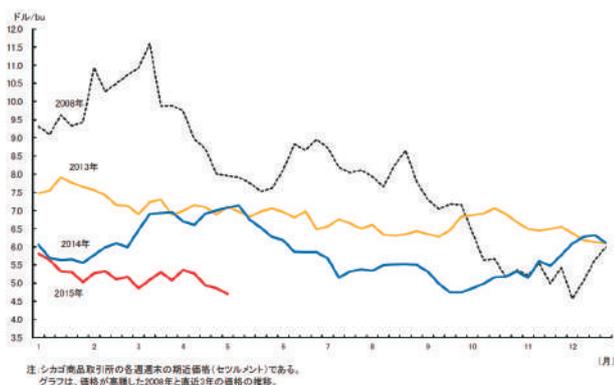


■現在までの価格推移

（とうもろこし）

2014年は、米国産地における春先の天候が低温多雨型となったことから作付けが遅延し5ドル／ブッシェル前後まで上昇した。5月以降生育に適した天候が続き、豊作期待から3ドル／ブッシェル台へ下落したが、年末にかけては大豆及び大豆粕の上昇につられ4ドル／ブッシェル台まで値を戻した。

2015年に入り、南米の豊作見通しなどから下落し、現在3.5ドル／ブッシェル付近で推移している。



（大豆）

2014年は、とうもろこし同様、春先の作付遅延から

■穀物の需給見通し

（5月米国農務省発表）

（とうもろこし）

この5月から新穀となる2015/16クロップの需給報告が始まった。

まず2014/15年のとうもろこし需給であるが、前月

〈米国産コーン需給、米農務省〉

	13/14	14/15		15/16	
		4月	5月	4月	5月
作付面積	95.4	90.6	90.6	NA	89.2
収穫面積	87.5	83.1	83.1	NA	81.7
収穫率(%)	91.7%	91.7%	91.7%	NA	91.6%
単収	158.1	171.0	171.0	NA	166.8
供給					
期初在庫	821	1,232	1,232	NA	1,851
生産	13,829	14,216	14,216	NA	13,630
輸入	36	25	25	NA	25
供給合計	14,686	15,472	15,472	NA	15,506
需要					
飼料・その他	5,034	5,250	5,250	NA	5,300
FSI	6,503	6,595	6,547	NA	6,560
(内/エタノール)	5,134	5,200	5,200	NA	5,200
総国内消費	11,537	11,845	11,797	NA	11,860
輸出	1,917	1,800	1,825	NA	1,900
需要合計	13,454	13,645	13,622	NA	13,760
期末在庫	1,232	1,827	1,851	NA	1,746
在庫率	9.16%	13.39%	13.59%		12.69%

単位：百万エーカー（面積）、ブッシェル／エーカー（単収）、百万ブッシェル（その他）

から目立った修正はなく期末在庫率は13.59%と高い水準を保っている。一方、ブラジル産の生産量が前月比で上方修正され、世界的な需給の緩和が確認される格好となった。

新穀の2015/16クロープについては、単収166.8ブッシェル/エーカーと、現時点ではトレンド単収が採用されているため現在生育中のクロープの状況を反映しているわけではないが、前年度に比べ作付面積が減少することやシカゴ定期の下落による輸出需要の増加で期末在庫率が減少し12.69%となる見通しとなっている。世界的な生産量は、ブラジル・ウクライナなどで減少、南アフリカ・アルゼンチンなどで増加の見通しとなり、前年度比で大きく変わらない。

(大豆)

大豆の2014/15クロープ需給は、需要の増加により期末在庫率が前月の9.94%から9.36%へやや減少する見通しとなった。

(米国産大豆需給、米農務省)

	13/14	14/15		15/16		
		4月	5月	4月	5月	
作付面積	76.8	83.7	83.7	NA	84.6	
収穫面積	76.3	83.1	83.1	NA	83.7	
収穫率(%)	99.3%	99.3%	99.3%	NA	98.9%	
単収	44.0	47.8	47.8	NA	46.0	
供給	期初在庫	141	92	92	NA	350
	生産	3,358	3,969	3,969	NA	3,850
	輸入	72	30	30	NA	30
	供給合計	3,570	4,091	4,091	NA	4,230
需要	圧搾	1,734	1,795	1,805	NA	1,825
	輸出	1,647	1,790	1,800	NA	1,775
	種子	97	98	98	NA	92
	その他	0	38	38	NA	38
	需要合計	3,478	3,721	3,741	NA	3,729
期末在庫	92	370	350	NA	500	
在庫率	2.65%	9.94%	9.36%		13.41%	

単位：百万エーカー(面積)、ブッシェル/エーカー(単収)、百万ブッシェル(生産量、需要)

一方2015/16クロープは、とうもろこし同様トレンド単収が採用されているものの、作付面積の増加が大きく寄与し、期末在庫は13.41%へ大きく改善される見通しが示された。世界的にはアルゼンチンの期末在庫が下方修正され、前年度比やや減少となっている。

■2015年の飼料原料価格・需給の見通し

(とうもろこし)

2015年の米国産とうもろこしは、作付けが順調に推移しており、現在3ドル50セント/ブッシェル付近のシカゴ定期は、今後更に下落することも考えられる。

しかしながら、日本の飼料業界では米国産とうもろこしの高水分や小粒化・粉化など品質について憂慮している面がある。これは米国の収穫量を重視した密植の影響や米国内の物流の問題などが要因として挙げられるが、今後、ブラジル産やアルゼンチン産など他産地の利用で品質問題を回避しようとする動きがある。現在、円安ドル高傾向が強まっており輸入原料は割高となるが、ブラジルの通貨であるリアル安も進んでおり、相対的にブラジル産とうもろこしの競争力が高まっている。そのうえブラジル産は品質も安定しており、

今後も積極的に使用していきたいという考えである。

(大豆粕・菜種粕等)

大豆粕についてもシカゴ定期の下落に伴い、価格は概ね低下傾向にあるが、為替相場の円安基調により予断を許さない。

菜種粕は国産が主体であるが、搾油メーカーが一部を輸出に回しており、国内在庫の減少により大豆粕に比べて価格の下げ幅は小さい。

(そうこう類)

この夏の気候が暑く推移すれば、清涼飲料やビールの需要増加で副産物となるグルテンフィードの発生量は増加すると思われるが、昨今の熱中症対策にはミネラルウォーターやお茶が推奨されるケースが多い。スポーツ飲料など甘い飲料は敬遠される傾向にあり、グルテンフィードの供給面には不安が残る。

また、最近「低糖質ダイエット」といわれる炭水化物の摂取を制限するダイエット法が流行し、意外だが小麦粉やコメの消費の減少から副産物であるふすまや米糠などの供給への影響も懸念されている。

(その他)

国の減反政策の一環である水田フル活用の目玉として飼料用米の利用が推進されている。飼料用米は、その単収により10アール当たり最大10万5千円の補助金が農家に支払われるため、今後も生産が増加すると見込まれるが、とうもろこし代替の飼料原料としてどこまで使用できるのか試行錯誤が続いている。

そのほか、北海道・九州など遠隔地への原料輸送に欠かせない内航船の船腹不足が構造的に続いている。トラック輸送においても、走行距離に関する規制強化やドライバー不足などが深刻化し、これら物流の問題がコストアップの要因を孕んでいる。

一方、昨年来の原油の国際相場下落で、輸入原料の海上運賃などの下落が期待されているが、為替相場の円安と相殺される状況である。

■外国為替

2014年10月末の日銀による第2弾となる大規模金融緩和策により、為替相場は1ドル115円を超える円安水準となった。2015年に入ると好調な米国の経済指標が発表されても118-120円のレンジでの値動きとなっていたが、FRB(米国連邦準備制度理事会)のイエレン議長による年内利上げを示唆する発言からドルが買われ、5月末には7年11ヶ月ぶりに124円台を付けた。現在も124円台前半で推移しているが、急激な円安の進行は、輸入企業である飼料業界にとって極めて厳しい逆風となっている。

以上のように、原油価格が下落し相場展開も軟調に推移する一方で、急激な円安が飼料原料価格の低下を阻んでいる状況といえる。

今後のTPP交渉の行方なども未だ不透明で、日本の農業をめぐる環境は引き続き厳しい状況にあるが、当社としても更なる原料調達コストの低減に努め、酪農・畜産農家の皆様へ貢献していきたいと考えている。